「昭和の言論　軍部批判と天皇機関説事件」　メモ

●満州事変からが、日本の言論機関の正念場だった

▽日本中が　なだれを打って

右側へ　移動してしまった時代

異常なほどに、軍国熱、排外熱が高まる

昭和大恐慌で空前の不景気。都会には失業者が溢れ、農村は米価暴落に喘いでいた。満州事変（昭和6年9月18日）で、国民には一筋の光が射したように見えたが、軍部の発言力を強くし、右翼や国家主義者を勢いづかせた。上海事変（7年1月28日）に続いて、満州国建国（3月1日）が強行され、反対した犬養毅首相は五・一五事件で暗殺。満州国が国際連盟から否定されると連盟を脱退（8年3月27日）、世界から孤立する道を選ぶ。

▽大新聞は　軍部横暴に　共同戦線を張るべきだった

緒方竹虎の痛切な反省

「日本の大新聞が、満州事変直後からでも、筆を揃えて軍の無軌道を警め、その横暴と戦っていたら、太平洋戦争はあるいは防ぎ得たのではないかと考える。当時の新聞界に実在した短見な事情が、機宜に『筆を揃える』ことをさせず、徒らに軍ファッショに言論統制を思わしむる誘導と間隙を与え、次々に先手を打たれたことも、今日訴えどころのない筆者の憾みである」　（米内光政海軍大将の伝記「一軍人の生涯」の中で）

「新聞の一廃兵が僭越感なしに次の世代に忠告し得ることは、言論の自由を死守せよということである。…言論の自由は各新聞の共同戦線なしには守れるものではない。少なくとも私の経験はそれを語るのである」

●新聞は、満州事変、満州国の独立支持に、筆を揃えた

▽全国132の新聞・通信社は　共同宣言

国際連盟で　リットン調査団の満州報告書が

審議されていた　昭和7年12月19日

「連盟脱退も辞さず」の　強硬態度を

「日本の言論機関」の名前で　声明した

犬養　毅（いぬかい・つよし）

安政2（1855）～昭和7（1932）岡山県生まれ。号は木堂。第1回総選挙以来、連続当選18回。護憲・普通選挙運動を推進、「憲政の神様」と称された。大正14年政界引退を表明したが、昭和4年政友会総裁に推され、6年首相。五・一五事件で暗殺

緒方　竹虎（おがた・たけとら）

明治21（1888）～昭和31（1956）山形県生まれ。朝日新聞に入社、大正14年37歳で東京本社編集局長。主筆、副社長として朝日の社論を引っ張る。昭和19年、小磯内閣国務相兼情報局総裁。敗戦後、東久邇内閣国務相。追放解除後、27年に衆院議員となり、吉田内閣官房長官・副総理格国務相。29年自由党総裁。保守合同後の自民党総裁と目されたが急逝した

132新聞・通信社の共同宣言

満州の政治的安定は、極東の平和を維持する絶対の条件である。…苟も満州国の厳然たる存立を危うするが如き解決案は、たとひ如何なる事情、如何なる背景に於て提起さゝるを問はず、断じて受諾すべきものに非ざることを、日本の言論機関の名に於て茲に明確に声明するものである。

共同宣言は昭和に入って3回

①初めて普選が実施された昭和3年2月を前に、東京・大阪の新聞・通信21社が「普選に対する共同宣言」の社告を掲載、国民の政治的良心に訴えた。

②第2回普選が行なわれた昭和5年2月、新聞19社が「自由公正な選挙を目指す共同宣言」を発表した。

③同年11月、浜口雄幸首相が東京駅で狙撃され、重傷を負った時、大井署

▽それまでの 共同宣言は
いずれも 議会政治 言論の自由を守る立場から
▽満鉄爆破 謀略で始まった 満州事変に対し
軍当局の「中国軍隊の犯行」を 鵜呑みにし
「自衛のための正当防衛、正義の戦い」 お墨付き
▽新聞が 正確に事実を掴み 報道していたら
その後の歴史の流れは 変わっていたろう
▽新聞には 連日のように
関東軍を讃え 中国軍を馬鹿にした 大見出し
「燦として輝くわが軍の偉容」(東京朝日)
「正義の前に支那軍殆ど壊滅」(東京日日)
「悪鬼の如き支那暴兵」(名古屋新聞)
▽文芸春秋に「満州事変をどう思うか」(読者アンケート)
「暴戾なる中国軍を断乎として叩くべし」
▽謀略計画を立てた 石原莞爾中佐(関東軍作戦参謀)は
「満州の武力占領には、国民世論の応援が必要」
新聞が まさに 旗振り役
国民に 嘘の発表を 信じ込ませてしまった

新聞の誤りが、どうして導かれたのか

毎日新聞は昭和20年10月、終戦処理委員会を作って検討した。第一に挙げているのが、革命中国の実情を余りにも知らな過ぎたこと、新聞記者の中国認識が無知無理解だったこと。

その頃のマスコミに出てくる中国は、辛亥革命で清国が倒れた後、各地に地方軍閥が割拠、内戦に明け暮れし自力では国を統一できない中国。日露戦争に勝ち「東亜の盟主」の慢心が、中国をチャンコロと一段下に見下すようになった。満州には日清、日露戦争で多大な血を流し、莫大な国費を投じて得た特殊権益の思い。

どうして反日抗日運動が起こるのか、日本人に対するテロが起こるのか ― 本当の原因には目をつぶって 、中国のナショナリズムの高まりも、「悪いのは中国」と思い込んでいた。

●「満州事変支持」の言論界で、唯一の例外が石橋湛山
▽満州事変直後(昭和6年9月26日) 東洋経済新報で
「日本は満蒙を捨てよ」と 満蒙放棄論を展開
「支那の統一国家建設の要求を認識せよ」

は「容体についてデマを流した」と時事新報政治部記者を3日間留置した。政局の動向を聞き出そうとしたのだが、新聞15社が「言論に対する暴圧」と共同抗議、内相が陳謝した。

浜口 雄幸(はまぐち・おさち)
明治3(1870)～昭和6(1931)高知県生まれ。蔵相、内相を歴任。昭和2年民政党結成で初代総裁となり4年首相。金解禁を実施、ロンドン海軍軍縮条約締結。右翼青年に狙撃されて重傷を負い、6年辞職

石原 莞爾(いしはら・かんじ)
明治22(1889)～昭和24(1949)山形県生まれ。陸軍中将。昭和3年関東軍参謀。満州事変を起こし、参謀本部作戦部長、京都師団長。東条と対立し16年予備役。立命館大教授となり東亜連盟運動を指導

石橋 湛山(いしばし・たんざん)
明治17(1884)～昭和48(1973)東京生まれ。身延山久遠寺法主杉田湛誓の長男。明治44年東洋経済新報入社、自由主義的立場から論陣を張り、昭和14年社長。21年吉田内閣蔵相。公職追放解除後、29年鳩山内閣通産相。31年保守合同後、初の自民党総裁選で岸信介を破り首相に就任したが病に倒れ2ヵ月で辞任。34年訪中して日中国交回復の土台を作る

石橋の「満蒙放棄論」

彼国人(中国人)が彼等の領土と信ずる満蒙に、日本の主権の拡張を嫌ふのは現実ではなくして、感情である。例へば如何に善政を布かれても、日本国民は、日本国民以外の支配を受くるを快とせざるが如く、支那国民にも亦同様の感情の存することを許さねばならぬ。然るに我国の満蒙問題を論ずる者は、往々にして右の感情の存在を支那人に向か

▽満蒙の権益を捨てて 日本は 存立できるか

石橋は疑問に答えている

満蒙は人口のはけ口として必要だと云ふが、人口問題は領土を広げたからといって解決できない。論より証拠、日本は朝鮮、台湾、樺太を領有し、遼東半島や南洋諸島、満州を支配しても、人口問題を解決できなかったではないか。

鉄、石炭などの資源の供給地として満蒙確保が不可欠だと云ふが、事実に反しており、もしそうだとしても、平和的な経済関係の方が、その目的を達することができるだろう。

満蒙を国防の第一線にしなければならぬ、と云ふが、それはちょうど、イギリスが国防のために対岸のヨーロッパ大陸に領土を持たなければいけない、と説くのに等しい。

満蒙は云ふまでもなく、無償で我国の欲する如くにはならぬ。少なくとも、感情的には支那全国民を敵に廻し、引いては世界列国を敵に廻し、尚我国はこの取引に利益があろうか。

▽反日・抗日運動の出発点は 大正4年1月
第1次大戦中 中国に対する「対支21ヵ条要求」

「対支21ヵ条要求」

旅順、大連や満鉄の権利の99年間延長が狙いだったが、この際だと、日本人の政治、財政、軍事顧問を雇えとか病院、寺院、学校の土地所有権を認めろ、警察は日中合弁か、大勢の日本人警察官を雇え、兵器も半数以上は日本のものを使え、など雑多な要求が21も。

中国は、受諾した5月9日を「国恥記念日」と名付け、反日・抗日運動が中国全土に広がっていった。国際会議の場で「一服でも人を殺せる毒薬を日本は二十一服も盛ったのだ」と、非難されることになる。

▽石橋は この時も「日本は帝国主義を捨てよ」
▽松岡洋右の「満蒙生命線論」が 国民大多数の声

●戦火の広がりと共に、「軍服がものをいう時代」に
▽象徴的な 大阪の「ゴー・ストップ事件」(昭和8年6月)

って否定せんとする。…

要するに、我国民が満蒙問題を根本的に解決する唯一の要件は、支那の統一国家建設の要求をまっすぐに認識することだ。蓋し我国民にして従来通り、満蒙に於ける支那の主権を制限し、日本の所謂特殊権益を保持する方針を採る限り、如何に我国から満蒙問題の根本的解決を望むも、其目的はとうてい達し得ぬこと明白である。

石橋は晩学の人

5年で済む中学を2回落第して7年かかり、第一高等学校も2回受験して失敗。早稲田哲学科を首席で卒業、東洋経済新報に入社したのが27歳の時。

社会評論雑誌の編集をしたが、翌年廃刊となり、畑違いの経済評論担当。新婚早々の石橋は通勤の市電の中でも経済学の原書を読んで猛勉強、「日本のケインズ」と言われるまでに。

ケインズ(John Maynard Keynes)
1883～1946 英国の経済学者。通貨金融問題の権威。1936年、「ケインズ革命」と呼ばれる独創的な経済理論を形成した

松岡 洋右(まつおか・ようすけ)
明治13(1880)～昭和21(1946)山口県生まれ。外交官、満鉄副総裁。昭和5年政友会代議士。8年国際連盟総会で満州国否認に抗議して退場、国民的英雄に。15年近衛内閣外相。日独伊三国同盟、日ソ中立条約締結。戦犯で起訴されたが病死

永井荷風の「断腸亭日乗」から

(昭和7年4月) 露天の玩具屋は軍人まがいの服装をなし、軍人の人形をはじめ飛行機戦車水雷艇の如き兵器の玩具を売る。蓄音器販売店には去年来軍歌を奏すること毎夜の如し。今に至るも人な

▽街頭での 些細な交通違反で
「皇軍の威信」をかけた 陸軍と
「警察官の執行権」を主張する 警察が対立
5ヵ月間にわたり 天下を騒がせる大事件に

ゴー・ストップ事件

6月17日午前11時過ぎ、北大阪の繁華街・天神橋筋交差点で起きた。外出を許され、映画見物に出かけた中村政一一等兵(22)(第4師団第8連隊)が赤信号を無視し、斜めに横切ろうとした。交通整理の戸田忠夫巡査(曽根崎署)が、メガホンで「危ない、気をつけろ」「生意気言うな」と押問答になり、派出所に連行された中村が「憲兵の言うことなら聞くが、警察の指揮に従う必要ない」殴り合いとなり、2人とも軽い怪我をしたが、通行人の急報で駆け付けた憲兵が師団司令部に「街頭で一巡査が名誉ある軍人を侮辱」と報告、子供の喧嘩に大人が乗り出す騒ぎに。大阪朝日新聞夕刊は5段抜きの大見出しで、「ゴー・ストップ繞つて啀(いがみ)合ひ 兵士と巡査が乱闘 派出所で互に負傷す」と伝えた。

▽井関隆昌大佐(第4師団参謀長)が 22日 記者会見
「現役の軍人は軍の統帥権の下にあり、陛下の股肱だ。交通違反があっても憲兵に通告すればよく、皇軍の威信に関する重大問題」 謝罪要求
▽粟屋仙吉警察部長(大阪府=のち広島市長の時に原爆で死亡)も
「軍人が陛下の軍人なら、警察官も陛下の警察官だ。街頭において兵隊が私人の資格で通行している時は、一市民として交通信号に従うのは当然だ。正当な職務行為で、謝罪の必要を認めず」
▽7月18日 中村が戸田を 傷害・名誉毀損で告訴
寺内寿一(師団長) 荒木貞夫(陸相)の 激励が飛んだ
▽警察は「中村が過去7回も交通違反」と発表
内務省も 全面的にバックアップ
第4師団対大阪府の 地方レベルの対立が
陸軍省対内務省と 政府レベルの泥試合に
▽天皇から 説明を求められ 荒木陸相も
強気に けしかけているわけには
いかなくなり 11月18日
白根竹介(兵庫県知事)の調停で 和解が成立した

お飽かずしてこれを聴く…軍隊の凱旋を迎る有様など宛然祭礼の賑に異ならず。今や日本全国挙って戦勝の光栄に酔えるが如し。
(昭和8年正月)二、三年来軍人その功績を誇ること甚しきものあり。古来征戦幾人回(いくたりかかえる)とは昔の事なり。今は征人悉く肥満豚の如くなりて還る。

永井 荷風(ながい・かふう)
明治12(1879)～昭和34(1959)東京生まれ。本名壮吉。明治36年外遊、帰国後「あめりか物語」「ふらんす物語」を発表、耽美派の流行作家に。43年慶応教授、三田文学を主宰。「つゆのあとさき」「ひかげの花」で好評を博したが、戦争激化で作品発表は困難に。大正6年から書き続けた日記「断腸亭日乗」。晩年は風変わりな生活で話題に。昭和27年文化勲章

寺内 寿一(てらうち・ひさいち)
明治12(1879)～昭和21(1946)山口県生まれ。陸軍大将・元帥。長州閥・正毅元帥の長男。第4師団長、台湾軍司令官歴任。昭和11年二・二六事件後広田内閣陸相。北支那方面軍司令官を経て16年南方軍総司令官。敗戦後シンガポールで病死

荒木 貞夫(あらき・さだお)
明治10(1877)～昭和41(1966)東京生まれ。陸軍大将。陸大校長、第6師団長など歴任、精神主義的・反共主義的言動で皇道派の中心的存在に。昭和6年犬養内閣陸相となり、陸軍中枢を自派で固めた。二・二六事件で予備役。13年近衛内閣文相。A級戦犯で終身禁固刑。29年仮出所

白根 竹介(しらね・たけすけ)
明治16(1883)～昭和32(1957)山口県生まれ。埼玉・静岡・広島・兵庫県知事などを歴任、昭和10年岡田内閣書記官長

陸軍の顔を立てた大阪府側の譲歩

和解の内容は、まず大阪府首脳が師団首脳を訪問し、巡査の行為を陳謝する。その上で師団側は、兵隊の行為に遺憾の意を表する。

大阪府警務課長今井久（戦後防衛次官）は「兵隊の信号無視は、ほんの十秒くらいの暴走だったが、それがそのまま昭和の歴史で軍部の大暴走の第一歩だったように思う」と回想している。

●軍部の勢いが強くなると、言論干渉も激しくなった

▽河北新報（仙台）は 満州事変1ヵ月後（昭和6年10月14日）
「陸軍が外交を動かしている」と 批判の評論

▽仙台連隊区司令官が 憲兵と 乗り込んで来た
「軍民離間を策する執筆者の名前を明かせ」
「在郷軍人会が不買運動をする」と 息巻いた

●戦前の政治史上、重大な意味を持つ五・一五事件

▽政党政治が 実質的に 終わりを告げ
ファシズムの時代に 突入するきっかけに

▽福岡日日（現西日本新聞）編集局長 菊竹淳は
5月16日夕刊に 社説「首相兇手に斃（たお）る」
犬養の識見 力量を讃えた上で
「その老首相を、政治の改革に藉口して虐殺し去るに至っては、彼等は国家を混乱に導くほか、何の目的なきものと断ぜざるを得ない」

17日朝刊に「敢て国民の覚悟を促す」

国民の進むべき政治的進路は、坦々として尚ほ国民の眼前に展開されて居る。其れは立憲代議政体である。明治大帝が、不磨の大典として、吾々国民に遺したまへる帝国憲法の規定する政治様式そのものである。独裁政治が、今日以上の幸福を国民に与うべしと、想像し得べき寸毫の根拠もない。ファッショ運動が日本を救うべしと、信じ得べき何等の根拠もない。吾々の政治的進路は明白である。国民に対する挑戦に向つては、断々乎としてこれを排撃するの堅き決心を懐かんことを要求せねばならぬ。

河北新報の「軍部外交批判」

満州事変勃発以来、三宅坂（陸軍省、参謀本部のこと）の独り舞台で若槻（礼次郎）首相などはどこぞへケシ飛んでゐるし、霞ケ関（外務省のこと）正統派なるものも鳴りを鎮めている。だからというので、軍閥も気をよくしてゐる。見給へ、三宅坂が日本の国家を代表している。懸案解決などといったところで一向ラチが明かぬがわれわれが乗出せば一気に解決するよ、といった大気焔。まるで無人の野を行くが如しである。名は政党内閣でも実質は軍閥内閣の観がある。（昭和6年10月14日「東京支社A生」）

若槻　礼次郎（わかつき・れいじろう）

慶応2（1866）～昭和24（1949）島根県生まれ。蔵相、内相を歴任、大正15年首相。昭和2年の金融恐慌で辞職。ロンドン会議全権を経て浜口首相狙撃事件で民政党総裁、再び首相となるも、満州事変勃発で8ヵ月で辞職。著に「古風庵回顧録」

五・一五事件で政府の措置

新聞は「言語道断、未曾有の不祥事」と総理を射殺した海軍士官の非を指摘したが、政府はすぐ、詳細な報道一切禁止の措置をとった。記事解禁は、軍法会議で陸海軍関係者21人が起訴された1年後の昭和8年5月17日。

この間、全国で70余りの新聞が発禁処分を受けている。

菊竹　淳（きくたけ・すなお）

明治13（1880）～昭和12（1937）福岡県生まれ。号は六鼓。明治36年福岡日日新聞に入社、編集長、編集局長などを経て昭和10年副社長。大正・昭和にかけて2700編の論説を執筆、議会政治を擁護、軍部の政治介入を批判した

▽社説の反響は 凄まじかった
　読者からは 称賛の投書が 束になって届いた
　編集局の電話は 軍人右翼の抗議で 鳴りっ放し
▽東条英機(久留米第18師団旅団長)は
　「福岡日日をぶっ潰してやる」と 怒鳴った
▽福岡の本社には 制服姿の将校が 押し掛け
　「陛下の軍隊を侮辱し、国家革新のために決起した将校たちを中傷するものだ」
　　社説の取り消しを要求し「もし応じないなら実力を以て新聞の発行を不可能にするぞ」

菊竹はひるまずに「騒擾事件と輿論」

「東京、大阪の新聞論調が、一見して何者かに恐怖し、萎縮して、率直に所信を表明出来ないかのような態度だ」 大角岑生海相は「首謀者は厳重に処断」と言いながら、「唯、何が彼ら純情の青年をしてこの過ちをなすに至らしめたかを考える時、粛然として三思すべきものがある」との談話を発表、煮え切らない態度だったし、新聞論調の多くにも、海軍士官の動機の純粋さを認める空気が出て来ていた。

「新聞に評論の使命があるとするなら、こうした時こそ文章報国の大きな任務を全うすべきだ。右顧左眄、云うべきを云わず為すべきを為さないのは、決して新聞記者の名誉ではない。世間にはともすれば愛国心を云々して、彼らの行動を弁護するような動きがあるが、こうした態度こそ、青年を誤らせるもので、最も慎むべきものだ」と警告した。

▽20日午後 急降下爆撃機の編隊が 飛んで来た
　直前に電話「謝罪しないなら爆撃するぞ」
　　社屋目がけて 急降下を繰り返し 再び電話
　「今のは練習だ。降伏しないなら
　　本当に爆撃する。どうだ、降伏するか」
▽菊竹は21日 社説「憲政の価値」で 脅しに答えた
▽高橋是清蔵相は閣議で 荒木陸相を 厳しく咎めた
　「こういうことを放置しておいて、軍の規律が保てるのか」「久留米師団に注意する」と約束
▽脅迫は 一応 収まったが
　在郷軍人会を動員して 不買運動が始まった

東条　英機(とうじょう・ひでき)
明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。統制派の中心と目され関東軍憲兵司令官、参謀長、陸軍次官を歴任。昭和15年近衛内閣陸相となり、中国撤兵に強硬に反対。16年首相に就任、陸相を兼務、憲兵による独裁体制を強化。戦況悪化で参謀総長も兼務したがサイパン陥落で19年7月辞職。戦後拳銃自殺を図ったが失敗し、A級戦犯で刑死

大角　岑生(おおすみ・みねお)
明治9(1876)～昭和16(1941) 愛知県生まれ。海軍大将。横須賀鎮守府長官を経て昭和6年海相。8年再び海相になり、条約賛成派の追放人事を行なう。軍事参議官で中国出張中、飛行機事故で殉職

社説「憲政の価値」

ファッショとは何か。要するに独裁の政治、権力の政治であると云うに帰する。その反面を云えば、人民自由の否定であり、寛容なる精神の破滅である。これ豈我国の社会を挙げて、憲法発布以前の状態に引き戻さんとするの企てではないか。官僚専制、閥族専制、さらに遡っては封建政治に逆転せしむることを意味するのではないか。

高橋　是清(たかはし・これきよ)
安政1(1854)～昭和11(1936) 江戸生まれ。日銀副総裁の日露戦争中、渡英して戦費調達の外債募集に成功。日銀総裁、蔵相を歴任し大正10年原敬首相暗殺で首相に。昭和2年の金融恐慌に田中内閣蔵相としてモラトリアムを断行し鎮静した。6年犬養内閣蔵相となり金輸出を再禁止。斎藤・岡田内閣に蔵相として留任したが、二・二六事件で暗殺される

▽部数に 影響が出てきて 販売担当役員が
「販売店からも苦情が来ている。少しお手柔らかに願えませんか。このままでは会社が潰れる」
▽菊竹は「馬鹿なことを言っちゃいかん。会社が潰れるかどうかの問題ではない。日本という国が潰れるかどうかの問題なんだ」

「六鼓」の号の由来を聞かれて…

3歳の時に左足を痛め、「ビッコをもじったんだ」冗談まじりに答えていたが雷神が背負っている6つの太鼓から採ったもので「雷のような警世の文章で世に立とう」と決意していた。
支那事変が始まって間もなく、結核で亡くなったが、見事な新聞人だった。

●軍部の圧迫に、言論界は昭和8年頃から次第に沈黙

関東防空大演習（昭和8年8月9日から3日間）

五・一五事件後「非常時」が流行語になっていた。斎藤実首相が就任演説で使った言葉だが、関東防空大演習は、民衆動員により国民に「非常時意識」を植え付けようとしたものだった。空母発進の敵機が東京空襲という想定で、「吾等の帝都は吾等で護れ」をスローガンに、陸海軍をはじめ民間防護団、家庭の主婦、小学生など10万人を動員した。
一番重視したのが灯火管制。陸軍東京警備司令部参謀が「軍隊以外の国家機関が、国防化する第一歩だ」と意義を強調したように、国家総動員の本格的訓練が始まったことを意味していた。東京市内全戸に献金袋が配られ、防空献金運動が行なわれたが、支那事変が始まると、この集金システムが町内会、隣組の土台に。

▽信濃毎日新聞主筆 桐生悠々は
8月11日「関東防空大演習を嗤ふ」
大がかりな演習を「滑稽だ」と 批判した

戦争中は無駄なことにエネルギー

家庭の主婦に竹槍訓練をさせたり、敵性語はいけないと、野球のストライクを「よし、一本」

菊竹の友人に宛てた手紙

小生もこんどこそは決心、報国の覚悟なり。毎日々々書き上げて、ホッと安心のような、不安心のような、翌日それを読んでは案をねってみたり、自分の卑怯を嗤ってみたり、しかし、大体において僕は云わんとすることを云った。小生すでに五十三。三十まで生きぬと云われた不具のからだ。死生必ずしも問題にあらず。ただ小生は、事実において非常に卑怯なるが故に、実はビクビクであることは間ちがいない。

長谷川光太郎（国民新聞経済部長）**の言葉**

「新聞及新聞記者」昭和8年10月号に「私たちは、思うことを率直に云い得ない立場に置かれている。何となく遠慮しなければならぬように立場に追い詰められている」

斎藤　実（さねとう・まこと）
安政5（1858）～昭和11（1936） 岩手県生まれ。海軍大将。明治31年海軍次官となり、39年第1次西園寺内閣以来、5代の内閣で海相。大正8年朝鮮総督。昭和4年再び総督。7年首相に就任、満州国を承認、国際連盟脱退を行なう。10年内大臣となり、二・二六事件で暗殺される

桐生　悠々（きりゅう・ゆうゆう）
明治6（1873）～昭和16（1941） 石川県生まれ。本名政次。下野、大阪毎日、大阪朝日記者を経て、明治43年信濃毎日主筆。明治天皇崩御の際、乃木希典殉死を「弄習打破論」で批判して論議を呼び退社。新愛知主筆の後、昭和3年再び信濃毎日主筆に復帰したが、「関東防空大演習を嗤う」が軍部から圧迫を受け退社。名古屋で個人雑誌「他山の石」を発刊して自由主義的立場から軍部批判を続けた

▽9月に入り 信州在郷軍人会(会員8万人)の面々が
軍服姿で 押しかけて来た「天皇はこの演習に
侍従武官を派遣され、意義のあることを認め
ておられる。それを嗤うとは何たる不忠か」
▽「信濃毎日不買同盟」を結成 桐生退社を迫った
▽交渉に当たっていた 小坂武雄常務(順造社長の弟)は
「十月の何日であったか、最後の妥結をして、終
列車で松本から帰る時、姨捨の車窓から眺めた
皎々たる明月の光は、私の全身を冷たくするよ
うに覚えた事を今なお忘れることは出来ない」
▽桐生は 不買運動撤回の代償に 退社した

●五・一五事件直後こそが、新聞共同戦線のチャンス
▽なぜ 出来なかったのか？

「新聞戦国時代」激しかった販売合戦

満州事変の直前(昭和6年9月1日)、上越線が開通して東京各社は新潟県進出にしのぎを削っていた。朝日も毎日も大量の特派員を満州に送り、猛烈なニュース合戦。連日、写真で埋めた号外が発行され、失業者が号外売りを志願した。50人ほどだったのが、年末には500人にも。

新聞広告にも不況の兆しが見え始め、広告収入に頼っていた新聞の経営難が叫ばれるようになった。朝日、毎日は部数増による経営安定化を図って昭和10年2月に九州、11月には名古屋で印刷を開始した。

▽発禁処分だけは 何としても 避けたい
大新聞の姿勢が 新聞の戦闘力を殺した
▽地方新聞は 身近な地元ニュースに 支えられ
抵抗力はあったが 在郷軍人会(会員300万人)の
不買運動はこたえた 次第に 沈黙するように

●「憲兵情報」は、朝日の軍部支持の方針を報告
▽朝日東西本社は 昭和6年10月16日 大々的に社告
「満州の我軍将士を慰問 広く慰問金募集」
▽応募氏名(1口50銭)を 紙面に掲載
毎日も 競い合うように 慰問金募集に
▽陸軍省には 12月18日までに
慰問金113万7300円 慰問袋が94万個も

「関東防空大演習を嗤ふ」

「国民は、かふした実戦が、将来決してあってはならないこと、又あらしめてはならないことを痛感したであらう。将来若し敵機を、帝都の空に迎へて撃つやうなことがあったならば、それこそ人心阻喪の結果、我は或は、敵に対して和を求むるべく余儀なくされないだらうか。…近代科学の驚異は、赤外線をも戦争に利用しなければやまないであらう。この赤外線を利用すれば、如何に暗きところに隠れてゐやうとも、明に敵軍隊の所在地を知り得る。

かふした観点からも、市民の、市街の消灯は、完全に一の滑稽である。敵機を関東の空に迎へ撃つといふことは、我軍の敗北そのものである。この危険以前に於て、我機は、途中これを迎へ撃って、これを射落とすか、又はこれを撃退しなければならない。要するに、空襲したものの勝であり、空襲されたものの負である。だから、この空襲に先立ってこれを撃退すること、これが防空戦の第一義でなくてはならない」

小坂 順造(こさか・じゅんぞう)
明治14(1881)～昭和35(1960)長野県生まれ。明治44年信濃毎日社長。45年衆院議員(当選6回)。信越化学工業社長となり、戦後は昭和29年に電源開発総裁

「憲兵情報」(昭和6年10月19日)

満州事変勃発から1ヵ月近く経った10月12日、朝日大阪本社で重役会議が開かれた。憲兵は8時間に及ぶ会議の結果を、次のように報告している。

「今後の方針として、軍備の縮小を強調するは従来の如くなるも、国家重大事に処し日本国民として軍部を支持し国論の統一を図るは当然の事にして、現在の軍部及軍事行動に対

▽朝日 毎日は 総力を挙げて 戦争キャンペーン
慰問団派遣 特派員報告会 ニュース映画会
▽飛行機献納運動も 盛んだった
陸軍は「愛国号」(昭和7年末までに68機) 海軍は「報国号」
▽昭和7年3月 大阪で「国防は台所から」
国防婦人会が結成され 白い割烹着姿で
大阪駅 大阪港で 出征兵士の接待に 当たった
▽10月には 大日本国防婦人会が 設立された

●「軍国美談」の洪水の中で…
▽子供の遊びも「戦争ごっこ」大流行り
・東京・大森で 小学生3人が「満州事変ごっこ」
1人が 空気銃で撃たれ 負傷
・川崎で 小学生2人が「肉弾三勇士」を真似て
猟銃ケースに 火薬を詰め点火 爆発で重傷
▽「捕虜になったら死ね」の思想も
▽上海事変で 重傷を負い 中国軍の捕虜になった
第9師団(金沢)大隊長 空閑(くが)昇少佐が
日本軍送還後 昭和7年3月28日 ピストル自殺
▽荒木陸相は大臣談話「最高の軍人精神を発揮して
死の道を選んだのだろう。立派な名誉の戦死だ」
▽帝国軍人には「勝利か死か」
いずれかの道しかなくなり「戦陣訓」に

●「日本人よ、理性を失うな」と訴えた馬場恒吾

「日本よ何処(いずこ)へ行く

(読売に昭和7年7月27日から1週間連載) まさか、そんな事はあるまいと思ふが、日本人が国民として理性を失ったら、日本はどうならうかと考へる。心中ばやりの世の中だから、日本が何処かの国と心中するか、或は国内に兇暴を働いて自殺するか、碌なことは想像に浮ばない。願はくは理性を失ふまい。願はくは周章狼狽して、へんな真似をすまい。願はくは此困難な時期に踏みこたへて、此国を破滅せしむることなしに、曲りなりにも安全な彼岸に着きたい。さうした祈願がひしひしと吾々の胸に迫って来る。

▽馬場は 新聞が 先頭に立って
「戦争支持」の旗を振っていることに 危機感

しては絶対批難批判を下さず、極力之を支持すべきこと」
(外務省文書マイクロフィルム所収)

熱狂的な反響「肉弾三勇士」

上海事変の廟行鎮攻撃(昭和7年2月22日)の際、3人の一等兵が鉄条網爆破で戦死した。爆薬操作を誤り、事故死と言われるが、陸軍は「友軍の突撃路を切り開くための覚悟の爆死」と発表。新聞も「世界無比の壮烈な戦死」と大々的に報道、映画、芝居と、興業界は「三勇士もの」一色に。

朝日、毎日が「三勇士の歌」を募集すると、1万8千編余りも集まった。毎日の当選歌は与謝野鉄幹。

「廟行鎮の敵の陣 我れの友隊すでに攻む 折から凍る二月(きさらぎ)の 二十二日の午前五時」

与謝野 鉄幹(よさの・てっかん)
明治6(1873)～昭和10(1935) 京都生まれ。本名寛。短歌革新と詩歌による浪漫主義運動を展開、雑誌「明星」を創刊、多くの俊才を育てた。昭和7年慶大教授。歌人晶子は夫人

「戦陣訓」(昭和16年1月8日)

支那事変の長期化に伴い、戦場での将兵の規律高陽、戦意を高めるため、東条英機陸相が全軍に配布した修身書。特に「名を惜しむ」の「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿れ」は、特攻精神や玉砕精神を生む原因になった。

馬場 恒吾(ばば・つねご)
明治8(1875)～昭和31(1956) 岡山県生まれ。国民新聞政治部長、編集局長を歴任。大正12年から政治評論家。自由主義的立場で論陣を張り、太平洋戦争中、軍

▽連載第1回は「ジャーナリズムへの苦言」
関東大震災の時「朝鮮人が襲って来る」
デマに惑わされ 2600人虐殺騒ぎを 例に挙げ
新聞の使命の 重大さを訴えた

強いことさえ言っていれば「正義」の時代

少し議論が違ふからと云って、互ひに相手を国賊呼ばわりして、暴力の制裁を加へると、大抵の人は黙って了ふ。議論があっても云はなくなる。さうして国が沈滞して衰亡する。

●軍人の中にも、理性的な人はいた
▽井上成美大佐は 戦艦比叡艦長に就任(昭和8年)
青年士官に 過激な革新運動参加を禁止
「勅諭衍義(えんぎ)」を配布 軍人の心構えを諭した

井上の「勅諭衍義」

「軍人が平素でも刀剣を帯びる事を許されて居り、我々もその服装を誇りとして居るのは、一朝事ある時、その武装で敵を斬り、国を守るという極めて国家的な職分を果たすからである。しかし、その一朝事ある時であるかどうかは、国家の意志が之を決する。即ち戦争と国の意志が決定し、『さあ、やれ』との統帥権の発動があって初めて軍人が敵人を殺し、敵物を破壊する事を許されるのである。しかるに、軍人が手近に武器を保有しているのを奇貨とし、統帥権の発動もないのに勝手に之を以て人を殺すような不法な事をすれば、名誉ある軍人は忽ち殺人の大罪人と化し、神聖な武器は殺人の凶器となる事を覚れ」

●五・一五事件の後から「思想対策」が表面に
▽警視庁に 昭和7年6月28日 「特別高等警察部」
▽小林多喜二が 虐殺されたのは 8年2月20日

徳田秋声日記(2月21日)

十九日に多喜二君が築地署に捕縛され、訊問中に心臓麻痺を起して死んだということが報ぜられている。布施さんの話では惨殺に近いものらしかった。検挙に際して捕縄のような部から一時執筆禁止に。戦後、昭和20年に読売社長となり、争議を収拾した。24年日本新聞協会初代会長

「ジャーナリズムへの苦言」

何が吾々をして理性を失はしめたか。それは簡単明瞭である。震災のために新聞がなくなったからである。その証拠には新聞が出る様になって、此等の流言蜚語は昼間の幽霊の如く消滅したではないか。世相不安は世相に不明な所があるから生ずる。凡てを書け。真実を語れ。世相不安は白昼の幽霊の如く清算される。…読者を盲目にして、而も自から新聞と称してゐる。かくして新聞が潰れるならば、それは新聞自から滅びたと云ふより外はない。

井上 成美(いのうえ・しげよし)
明治22(1889)～昭和50(1975)宮城県生まれ。海軍大将。昭和12軍務局長となり米内光政海相、山本五十六次官を助け、日独伊三国同盟に反対。第4艦隊長官を経て17年海兵校長、英語教育を貫く。19年次官に就任、終戦和平に尽力した

悪名高い「特高」

明治44年、警視庁に新設された特別高等課を拡充したもの。幸徳秋水(無政府主義者)ら12人が、大逆事件で死刑になった年。最初はスト、爆発物取り締まり、出版物検閲が主な仕事だったが、昭和3年に治安維持法改正で「国体変革」の罪に死刑が適用されると、全国の警察に特別高等課を置いて共産主義対策を重点目標にした。

共産主義者検挙は、昭和7年1万3900人、8年1万4600人。逮捕がそのまま死刑執行となる激しい拷問が行なわれ死者は100人を超えると言われる。

ものでひきずって歩いた形跡があるそうだ。小林の母は息子の体をなぜて「ワイ、あたらむしじゃー」といって泣いたそうだ。

▽特高は その一方で「転向すれば罪を許す」
昭和8年6月 最高幹部 佐野学 鍋山貞親が
獄中で「転向声明」 転向者が続出し
共産主義運動は 急速に 内部崩壊していった

●自由主義排撃の動きも、勢いを強めていた

絶好の材料「司法官赤化事件」

共産党幹部の取り調べから、東京地裁判事尾崎陞(すすむ)がシンパであることが分かり、昭和7年11月12日検挙された。山形、長崎でも判事、書記9人が治安維持法違反で起訴された。

▽蓑田胸喜(慶大教授)は
「赤の司法官がいるのは、帝国大学教授に赤がいて、司法官の試験委員をしているからだ」

人を失脚させるには「赤」のレッテル

蓑田は、陸軍から莫大な機密費を貰って雑誌「原理日本」を発行、自分の主張と違う学者を、学問論争はそっちのけで片っ端から「赤だ、売国奴だ、反逆者だ」と攻撃。「蓑田こそ日本を反動、暗黒時代にした張本人」と言う人は多い。

●蓑田が、真っ先に槍玉に挙げたのが滝川幸辰(京大教授)
▽京大は 学問の自由 大学の自治で 大きく揺れ
全国の学園に「粛学の嵐」が 吹き荒び
多くの 自由主義的 進歩的学者が
学園から 追われていった (京大事件 滝川事件)

末川博(当時京大教授)の話

蓑田が昭和4年6月、京大講演部に招かれ講演した時、学生たちの質問攻めにあい、座談会でもこっぴどく叩かれた。「部長の滝川がやらせたのだ」と深く恨むようになり、文部省にも再三手紙を出して「危険思想の持ち主だから、宜しく処分すべし」と、訴えいたという。

小林 多喜二(こばやし・たきじ)
明治36(1903)～昭和8(1933) 秋田県生まれ。小樽高商卒業後、北海道拓殖銀行に入り労働運動に参加。文学を志し、昭和4年「蟹工船」を発表、プロレタリア作家として認められる。6年共産党入党。街頭連絡中、築地署に逮捕され拷問死

徳田 秋声(とくだ・しゅうせい)
明治4(1871)～昭和18(1943) 石川県生まれ。本名末雄。自然主義文学の代表作家。昭和16年、情報局の弾圧を受けて未完に終わった「縮図」は傑作といわれる

佐野 学(さの・がく)
明治25(1892)～昭和28(1953)大分県生まれ。昭和2年共産党委員長。4年上海で検挙され無期懲役判決。戦後、早大教授

鍋山 貞親(なべや・さだちか)
明治34(1901)～昭和54(1979)大阪生まれ。共産党創立に関わり、検挙されて無期懲役判決。戦後は反共運動を指導

蓑田 胸喜(みのだ・きょうき)
明治27(1894)～昭和21(1946)熊本県生まれ。慶大教授。大正14年「原理日本社」を設立、狂信的な国粋主義思想により、共産主義撲滅・政党撲滅を叫び、自由主義学者を攻撃した。昭和13年「帝大粛正期成同盟会」を結成し、矢内原忠雄教授ら排撃運動の中心に。戦後、郷里で自殺

滝川 幸辰(たきがわ・ゆきとき)
明治24(1891)～昭和37(1962)岡山県生まれ。刑法学者。大正7年京大助教授、13年教授。昭和8年著書「刑法読本」が危険思想として休職処分。辞職後、弁護士として活動。戦後京大に復学、法学部長を経て28年総長。日本刑法学会初代会長

▽昭和8年1月の議会で 宮沢裕(政友会代議士・喜一元首相の父)は
「刑法読本(瀧川の著書)は姦通を奨励し、内乱を是認しており、赤化思想の所産だ。瀧川を罷免せよ」
▽鳩山一郎(文相)が「調査の上、厳重処分する」
帝国大学 全教授の思想・動向調査を 命じた
▽読売は 社説で「こんなことで罰せられていたら、社会科学の研究者は一人も存在を許されなくなる」文部省を「軽率極まりない」と非難
▽宮沢の質問材料も 文部省の調査資料も
出所は「原理日本」出来レースのようなもの

●内務省は4月11日、「刑法読本」を発禁処分
▽鳩山文相も 22日 小西重直総長を呼び出し
「赤化的傾向がある」と 滝川辞職を要求した
▽京大法学部は 緊急教授会で声明
「教授の学問上の見解の当否は、文部当局の判断により決められるべきではない。もし政府がその時々の政策によって教授の地位、進退を左右できるとすれば、学問研究の自由が失われる」
▽小西総長も 5月24日 辞職要求拒否を回答
▽文部省は 5月26日 一方的に 滝川休職を発令
▽法学部全教授(15人) 助教授 講師 助手が総辞職
夕方からの学生大会も「総退学」を声明
退学届は 1300通にのぼった
▽学生の抗議運動は 全京大から 全国の大学へ
▽文部省は 学部閉鎖をちらつかせながら 妥協工作
▽滝川のほか 末川ら強硬派5教授を 依願免官とし
「教授の進退は、教授会の答申による」と 約束
▽7教授が「目的を達した」として
辞表を撤回し 教授団は分裂した
▽特高の弾圧 夏休みに入ったこともあり
学生の抗議運動は 勢いを 失っていった
▽京大事件 最大の特徴は
自由主義的な学説までが「赤を招く」と弾圧
国家主義者の
自由主義陣営に対する 進軍ラッパだった

●次の攻撃目標は、美濃部達吉の「天皇機関説」
▽昭和10年2月18日 貴族院で 菊池武夫(元陸軍中将)は
美濃部 一木喜徳郎(枢密院議長・美濃部の恩師)を 攻撃した

末川 博(すえかわ・ひろし)
明治25(1892)～昭和52(1977)山口県生まれ。民法学者。大正14年京大教授となり、昭和8年滝川事件で辞職。戦後、20年に立命館大学長、40年まで在任

鳩山 一郎(はとやま・いちろう)
明治16(1883)～昭和34(1959)東京生まれ。大正4年政友会衆院議員(当選15回)。昭和2年内閣書記官長。6年犬養内閣文相、斎藤内閣にも留任。戦後、自由党を結成し初代総裁となったが、21年5月組閣直前、公職追放で吉田茂に総裁を譲る。29年日本民主党結成、総裁に。同年12月首相就任。31年自民党総裁となり、日ソ国交回復を実現した

小西 重直(こにし・しげなお)
明治8(1875)～昭和23(1948) 山形県生まれ。教育学者。広島高等師範教授を経て大正2年京大教授。昭和8年総長。滝川事件で辞任。のち千葉工大学長

末川博の回想
あれが日本の自由主義陣営の、ファシズムに対する最後の抵抗だったと思う。京大事件で堰を切って落とされてからは、もうどうすることも出来なかった。

美濃部 達吉(みのべ・たつきち)
明治6(1873)～昭和23(1948) 兵庫県生まれ。明治33年東大助教授、35年教授となり憲法・行政を担当。45年「憲法講話」を刊行、天皇機関説を主張し、上杉慎吉と論争になる。昭和7年貴族院議員となるが、10年著書3冊が発禁処分となり辞職。戦後、枢密顧問官。「明治憲法を改正しなくても民主的改革は可能」とした。東京都知事をした亮吉は長男

▽「彼らの本には恐ろしい事が書いてある。議会は、天皇の命にも何も服するものじゃない、と書いてある。これは国体を破壊するものであり、反逆だ」
美濃部を「学匪」と罵った

「天皇機関説」は、どんな学説だったのか

明治憲法は、第1条に「大日本帝国ハ万世一系ノ天皇之ヲ統治ス」とあり、この条文をどう解釈するか、日本の国家の統治権をめぐって、明治の中頃から東大法学部教授の間で盛んに論争が行なわれてきた。

穂積八束、上杉慎吉は天皇主権説で、第3条に「天皇ハ神聖ニシテ侵スヘカラス」とあることから、統治権は天皇固有のものであり、天皇の権力を絶対的・万能なものとした。

美濃部は、第4条「天皇ハ国ノ元首ニシテ統治権ヲ総攬シ此ノ憲法ノ条規ニ依リ之ヲ行フ」を、国家法人説に基づいて解釈し、統治権は法人である国家に属するとした。天皇、議会、裁判所などは、国家という法人の機関であり、天皇はその最高機関として統治権を行使する。統治権は万能・無制限ではなく、法律上の制限を受けるし、国民の幸福増進の目的に為に認められると、天皇主権説の万能論も否定した。

▽この論争は 大正末には 美濃部に軍配
大正デモクラシー花盛り
議会政治 政党政治が 展開していく中で
上杉の「君主ありて人民あり」は 否定され
機関説は 憲法学会 公認の学説として定着

●それが突然、昭和10年になって、岡田啓介内閣最大の政治課題として、内閣を揺さぶることに
▽機関説は 議会の役割を重視し
議会中心の政治運営に 正当性を与えている
▽軍部 国家主義者には 邪魔な学説だった
「天皇親政」を唱え 統帥権を振りかざすには
天皇の権力を 神聖・絶対無限にする必要
▽菊池(国本社の有力メンバー)には
これで 一木(枢密院議長)を 辞職に追い込み
平沼騏一郎(枢密院副議長)を議長にし 倒閣の魂胆も

菊池　武夫(きくち・たけお)
明治8(1875)～昭和30(1955) 宮崎県生まれ。陸軍中将。奉天特務機関長など歴任。昭和6年貴族院議員となり勤労連盟・国際反共連盟で右翼活動を行なった

一木　喜徳郎(いちき・きとくろう)
慶応3(1867)～昭和19(1944) 静岡県生まれ。明治27年東大教授。法制局長官、文相、内相を歴任。枢密院副議長を経て大正14年宮内相。昭和9年枢密院議長

国体

軍部や国家主義者が戦前に「錦の御旗」として盛んに使った。天皇が統治権の主体であり、天皇を倫理的・精神的・政治的中心とする国の在り方。ポツダム宣言受諾かどうかで揺れた時も、「国体護持」が大きな争点に。

穂積　八束(ほづみ・やつか)
万延1(1860)～大正1(1912)愛知県生まれ。法学者。明治21年東大教授となり憲法論争で上杉を支持。32年貴族院議員

上杉　慎吉(うえすぎしんきち)
明治11(1878)～昭和4(1929) 福井県生まれ。明治39年ドイツ留学、帰国後東大教授。憲法講座を担当し、大正1年「国体に関する異説」を発表、美濃部の天皇機関説を攻撃した。七生社、建国会などを結成、国家主義運動を行い、天皇制絶対主義勢力の理論的・精神的指導者に

岡田　啓介(おかだ・けいすけ)
慶応4(1868)～昭和27(1952) 福井県生まれ。海軍大将。連合艦隊長官を経て昭和2年田中内閣海相。7年斎藤内閣海相。9年7月首相に就任。二・に六事件で襲撃され、危うく難を逃れる。重臣として終戦和平に尽力。著に「岡田啓介回顧録」

●美濃部は2月25日、貴族院で所信を披瀝した
▽「反逆者、学匪と言われるのは堪え難き侮辱」と
前置きして 1時間にわたり
「もし、機関説を否定し、天皇の統治権の絶対性を認めると、租税は国税ではなく、天皇の一身に属する収入としなければならないし、天皇の締結した国際条約は天皇個人の契約になる」
▽国家と天皇の関係を 分かりやすく 説明すると
日頃 ヤジ一つない貴族院で 万雷の拍手
▽新聞各紙も「学説の問題は学問の領域」
菊池の攻撃を「非礼だ」と 非難した

●政友会が政権獲得のチャンスと見て、機関説排撃運動に乗ったことが、大きな政治問題にした

政治的に禁止しよう

美濃部亮吉(長男・元東京都知事)は、「弁明が余りにも理路整然としていて、学問的には機関説がいかにも正しいという風に話したのがまずかった。学説論争ではかなわないから、政治的に禁止しようとなったのだ」

▽衆議院で 2月27日 江藤源九郎(元陸軍少将)が
問題を蒸し返し 機関説を攻撃した
▽江藤は 翌28日 美濃部を 不敬罪で告発
▽貴族院は 3月20日「政教刷新に関する建議」
衆議院も 23日「国体に関する建議」を可決
「政府は、崇高無比な国体とは相容れない言説に対して、直ちに断固たる措置を取るべし」
▽鈴木喜三郎(政友会総裁)が 提案説明に 立ったが
政党自ら 政党政治を否定する 自殺行為だった

●機関説問題は、燎原の火のように全国へ波及
▽陸軍も 機関説排撃の正面に 出てきた
真崎甚三郎(教育総監)は 4月6日
師団長会議で「機関説を排撃すべし」と訓示
▽東京では 在郷軍人会が「大逆思想を根絶せよ」
大ノボリを持って 市内を練り歩いた
▽岡田内閣倒閣運動へと 発展していったが
菊地 江藤 真崎 鈴木が 平沼 蓑田と
連絡を取り合っての 連携プレーだった

平沼 騏一郎(ひらぬま・きいちろう)
慶応3(1867)～昭和27(1952) 岡山県生まれ。検事総長、大審院長、法相を歴任。右翼結社「国本社」を主宰し枢密院副議長時代、ロンドン軍縮条約に反対。昭和11年枢密院議長。14年首相に就任。独ソ不可侵条約締結で7ヵ月余りで辞職。A級戦犯で終身禁固刑。仮出所中に病没

美濃部の弁明演説

天皇は国の元首として、言い換えれば国の最高機関として一切の権利を総攬し給い、国家の一切の活動は、立法も司法も行政も全て天皇にその最高の源を発するものと観念するものであります。これが、いわゆる天皇機関説の生ずる所以であります。

江藤 源九郎(えとう・げんくろう)
明治12(1879)～昭和32(1957)東京生まれ。陸軍少将。「佐賀の乱」で処刑された江藤新平の甥。昭和2年予備役となり、7年衆院議員(政友会)。平沼直系といわれ、自由主義者攻撃の先頭に立った

江藤の機関説攻撃演説

機関という言葉は、人に使われる機械とか道具という意味だ。天皇の神聖を汚すものだ。機関説は、天皇自ら主体的に行動できず常に助言者の助言通りに行動すべき、と主張している。これは天皇をロボットにしようとするものだ。

鈴木 喜三郎(すずき・きさぶろう)
慶応3(1867)～昭和15(1940) 神奈川県生まれ。司法次官、検事総長を歴任し大正13年清浦内閣法相。昭和2年田中内閣内相となり、特高警察拡充、治安体制強化を推進した。犬養内閣内相兼法相。犬養暗殺後、政友会総裁に選ばれた

●岡田内閣も、一歩ずつ後退していった

▽岡田首相は 政治問題にしないよう

「美濃部の国体観念に、誤りはないと信ずる」

「学説の当否は、学者の論議に任せたい」

▽荒木に代わり 陸相になった林銑十郎も 最初は

「法理論の問題であって、軍の関与すべき問題でない」「機関説が、軍隊教育に悪影響を及ぼした事実はない」常識的な答弁をしていたが

「こうした説は、消滅させるように努める」

▽閣僚が 食い違うことを言えば

「閣内不統一」で 総辞職に 追い込まれる

政府答弁も 次第に 林に歩調を合わせるように

▽内務省は 4月9日 美濃部の著書3冊を 発禁処分

陸軍部内には皇道派－統制派の対立

陸軍中枢を皇道派で固め荒木人事に、反発するグループが生まれた。中心は永田鉄山少将。その考えは、軍部が統制を保ち、陸相の政治的発言力を強めて、官僚や政財界とも連携、漸進的に国家改革を実現させる(それで統制派と言う)。

林は、陸士で真崎の1期先輩。顎で使われるのが腹立たしかったのか、陸相に就任(昭和9年1月23日)すると、軍務局長に永田を起用した。永田にとって皇道派青年将校の唱えるクーデター主義は、有害無益そのもの。皇道派粛正人事に着手した。一方、真崎が機関説排撃に出たのは、倒閣により皇道派大臣復活の狙いがあったから。統制派も機関説には反対だったが、倒閣の手段に利用されるのは警戒した。林にやらせようとしていた部内改革が頓挫してしまう。

▽岡田発言が「私は機関説に賛成してはいない」

後退していったのも 林・永田コンビによる

陸軍の統制回復に期待し 歩み寄ったもの

●林陸相は、真崎教育総監更迭を決意した

▽7月11日 真崎に

「君は閥を作ってその頭領となっていて、軍の統制上困るので軍事参議官に替わって貰いたい」

▽真崎は 抵抗した「陛下に直隷する教育総監の進退を、大臣一人で決定するのは、統帥権干犯だ」

真崎 甚三郎(まざき・じんざぶろう)

明治9(1876)～昭和31(1956) 佐賀県生まれ。陸軍大将。台湾軍司令官を経て昭和6年参謀次長。荒木陸相と共に皇道派の指導的存在となる。9年教育総監に就任したが翌年林陸相により更迭。二・二六事件で軍法会議にかけられたが無罪

林 銑十郎(はやし・せんじゅうろう)

明治9(1876)～昭和18(1943) 石川県生まれ。陸軍大将。昭和5年朝鮮軍司令官。満州事変で1個旅団を満州に派遣、越境問題を起こす。7年教育総監。9年斎藤内閣陸相になり、岡田内閣にも留任して、真崎教育総監を更迭。12年2月首相に就任したが、4ヵ月の短命内閣に終わる

林への陸相交替劇

五・一五事件には陸軍士官候補生11人が参加していたが、皇道派は、荒木の陸相辞任が勢力後退につながると強引に留任させた。ところが、昭和9年正月、荒木が宮家の年賀回りで深酒して官邸に戻ると、青年将校が待ち構えていて、飲み比べ。風邪を引いて肺炎になり、議会に出席できずに辞表を出す羽目に。

皇道派は、比較的無色な林を陸相にして、真崎が代わりに教育総監になり、林を監視することに。真崎は、林が東京要塞司令官で予備役寸前のところを上層部に働きかけて近衛師団長にしてやった経緯もあり、林を陸相にしても、思い通りになると思っていたのだ。

永田 鉄山(ながた・てつざん)

明治17(1884)～昭和10(1935)長野県生まれ。陸軍少将(死後中将)。陸軍切っての逸材といわれ、陸軍省動員・軍事課長を経て昭和9年軍務局長に就任。軍部中心の国家総力戦、総動員体制の基礎を作る。皇道派相沢中佐により斬殺される

7月12日の三長官会議で

親補職以上の大将、中将の人事は、三長官（陸軍大臣、参謀総長、教育総監）会議にかけられるのが、慣例となっていた。席上、真崎が更迭人事に強硬に反対すると、閑院宮参謀総長が「教育総監は陸軍大臣の人事の進行を邪魔するのか」。この一喝で、真崎更迭は決まった。

真崎が参謀次長時代、参謀本部の実権を握って、閑院宮を名目総長、棚上げしていたから、快く思っていなかったという。

▽7月16日　真崎を更迭　軍事参議官にし
　教育総監には　渡辺錠太郎の人事が　発令された
▽岡田内閣は　8月3日　「国体明徴」の政府声明
　明徴とは　明らかに証明すること
　「統治権が天皇になく、天皇はこれを行使するための機関であるといった説は、万邦無比の我が国体の本義を愆（あやま）るものだ」
▽併せて　政治攻撃の対象　一木（枢密院議長）について
　「機関説論者ではない」の　首相談話を発表
　岡田内閣は　これで　幕引きにする積もりだった

●ところが、永田軍務局長斬殺事件が起きてしまった
▽8月12日朝　皇道派・相沢三郎中佐が
　真崎更迭を「永田の差し金」と恨み
　軍務局長室に押し入り　いきなり
　軍刀を抜くと　用談中の永田を　斬り殺した
▽精神異常としか　言い様のない行為だが
　皇道派青年将校の間では
　「国家革新の信念に基づく崇高な行為だ」
　こうした独断と妄想が　二・二六事件へ
▽林陸相は　9月4日　引責辞任　後任は川島義之

●美濃部の心境声明が、機関説排撃を再燃させた
▽9月18日　貴族院議員を辞職
　司法省も　不敬罪ついて　不起訴処分にしたが
　「私が辞めたのは、学説を翻したとか、自分が間違っていたと認めるのでない。ただ現在の貴族院の空気では、私が議員としての職分を尽くすのが困難だと感ずるからだ」

真崎は日記に

不逞の奴なり。予は大義名分の問題なる故斃（たおれ）る迄争ふと断言せり。

閑院宮　載仁親王（かんいんのみや・ことひとしんのう）
慶応1（1876）～昭和31（1956）　伏見宮邦家親王の第16王子。陸軍大将・元帥。第1師団長、近衛師団長を経て昭和6年参謀総長となり、15年まで在任

渡辺　錠太郎（わたなべ・じょうたろう）
明治7（1874）～昭和11（1936）　愛知県生まれ。陸軍大将。航空本部長、軍事参議官を経て昭和10年教育総監。二・二六事件で皇道派青年将校により殺害される

相沢　三郎（あいざわ・さぶろう）
明治22（1889）～昭和11（1936）宮城県生まれ。陸軍中佐。連隊勤務の間に士官学校、戸山歩兵学校の剣道教官（剣道4段）。永田斬殺で軍法会議で死刑

狂信的な皇道派将校

相沢（福山・歩兵第41連隊勤務）は8月の定期異動で台湾へ飛ばされ、赴任途中の犯行だった。憲兵に連行されたが、罪の意識は全くなく、そのまま買物をして台湾へ行く積もりで、「自分には伊勢の大神が乗り移って天誅を下したのだ」と、憲兵を手こずらせた。

軍法会議で動機について「永田閣下は悪魔の総司令部であると思い、大逆の枢軸を殲滅して昭和維新の大業を翼賛し奉ろうと思った」

川島　義之（かわしま・よしゆき）
明治11（1878）～昭和20（1945）愛媛県生まれ。陸軍大将。第3師団長、朝鮮軍司令官、軍事参議官を経て昭和10年陸相。二・二六事件終結後に予備役に

▽陸軍はカンカン 政府に「国体明徴」の再声明を
美濃部も 司法省から
「不起訴を取り消す」と言われ 声明を取り消す

●政府は10月15日、再度「国体明徴」声明

「芟除」(さんじょ)は、根こそぎ刈り取ること

内務省の発禁処分は、美濃部以外の機関説論者にも及び、30種余りの本が絶版にされた。全国の大学で、美濃部学説を継承する教授は、文部大臣訓令により、講座を廃止するか、交替させられた。天皇機関説は、まさに国家により否定され、葬られた。

▽陸軍は この時
国家の「法人格」まで 否定するよう 要求した
▽岡田首相は 清水澄(行政裁判所長官)から
「それでは外国との条約締結が不可能になる」
岡田は「法人格を否定しないよう、
陸軍の攻勢を食い止めるのがやっとだった」

●昭和天皇は、機関説に賛成だった
▽本庄繁(侍従武官長)は 天皇の言葉を
「本庄日記」に 生々しく 記録している
▽「君主主権よりも、むしろ国家主権の方が良いと思う。君主主権はややもすれば専制に陥りやすい」
▽軍部の魂胆も 鋭く 見抜いていた
「軍部にては機関説を排撃しつつ、而も自分の意思に悖る事を勝手に為すは即ち、朕を機関説扱と為すにものにあらざるか」
「若し思想信念を以て科学を抑圧し去らんとするときは、世界の進歩は遅るべし」
▽軍部に押され 後退し続ける岡田内閣を
関西の風水害 当たらない天気予報に なぞらえ
「この頃の天気は無軌道なるが、政治も亦然り」

●機関説排撃運動は、「合法無血のクーデター」
▽言論 学問の自由への暴力が
猛威を ほしいままにして 終わりを告げた
▽尾崎行雄は「独り完全に言論の自由を
行使する者は、軍人とその追随者だけ」

「国体明徴」再声明

抑々我国に於ける統治権の主体か天皇にましますことは我国体の本義にして帝国臣民絶対不動の信念なり帝国憲法の上諭並条章の精神亦茲に存するものと拝察す然るに漫りに外国の事例学説を援いて我国体に擬し統治権の主体は　天皇にましまさすして国家なりとし　天皇は国家の機関なりとなすか如き所謂天皇機関説は神聖なる我国体に戻り其本義を愆るの甚しきものにして厳に之を芟除せさるへからす

清水　澄(しみず・とおる)
明治1(1868)～昭和22(1947) 石川県生まれ。明治39年行政裁判所評定官。昭和7年同所長。帝国芸術院長、枢密院議長。戦後、占領軍により公職追放の直後、帝国憲法改正に反対の遺書を残し自殺

本庄　繁(ほんじょう・しげる)
明治9(1876)～昭和20(1945) 兵庫県生まれ。陸軍大将。大正10年から3年間、張作霖の軍事顧問を務める。昭和6年関東軍司令官となり満州事変を指揮。8年侍従武官長・戦後自決。著に「本庄日記」

「現人神」について

機関説排撃論者が、天皇を神聖絶対なものにするため、盛んに「現人神」という言葉を使った時、本庄に「自分の地位は別だが、肉体的には武官長と何ら変わらない。機関説を排撃するために、自分を動きをとれないものにすることは、肉体的にも精神的にも迷惑である」
天皇は21年元日、「人間宣言」をして天皇の神格化を否定したが、とっくに「神ではない」と言っていた。

▽軍部は 天皇を 神聖絶対なものにして
議会の権能を 無力なものにし
天皇を「最も都合のよい機関」として
利用する基礎を 固めた

●桐生悠々は、死ぬまで軍部批判を続けた
▽二・二六事件直後「皇軍を私物化して
国民の同情を失った軍部」と題し こう書いた
「だから、言ったではないか、国体明徴よりも
軍勅明徴が先であると。だから、言ったでは
ないか。五・一五事件の犯人に対して一部国
民が余りに盲目的、雷同的賛辞を呈すれば、
これが模倣を防ぎ得ないと」
▽「軍勅明徴」とは 軍人勅諭の精神
「軍人は政治に拘るべからず」を しっかりしろ
▽名古屋で 会員制の読書会を作り
会員(小坂順造など300人)に 会報「他山の石」を配布
▽昭和16年9月10日 喉頭ガンで 亡くなった
筆がとれなくなり「廃刊の挨拶」を書いたが
「反軍的」の理由で 発禁になった

●新聞界の抵抗も、昭和10年までが限度だった
▽10年代に入り 急速に ファッショ化 軍国化
▽政府は 国論統一のため 昭和11年元日
日本電報通信(通信部門) 新聞聯合の
2大通信社を合併させ「同盟通信社」を設立
内閣に 情報委員会 情報一元化を図った
▽委員会は 昭和15年12月6日 内閣情報局となり
敗戦まで 言論統制機関として 言論界に君臨
▽支那事変が始まると 国内は 戦時体制
政府は 昭和12年7月13日「軍機保護法」を改正
軍機 軍略に関する報道は
陸海軍大臣の許可がない限り 一切 報道禁止
▽新聞用紙 インクも 配給統制時代になり
言うことをきかない 新聞には
「用紙をやらないぞ」
この一言だけで 大きな脅しになった
▽言論機関にとっては 満州事変から
五・一五事件にかけてが 正念場だった

尾崎　行雄(おざき・ゆきお)
安政5(1858)～昭和29(1854) 神奈川県生まれ。号は咢堂。第1回総選挙以来、連続当選25回。文相、東京市長を歴任。「大正政変」で護憲運動の先頭に立ち「憲政の神様」と称される。昭和27年代議士生活63年で国会から「名誉議員」の称号

「他山の石」廃刊の挨拶

「小生の痼疾喉頭カタル非常に悪化し、流動物すら嚥下し能わざるように相成、やがてこの世を去らねばならぬ危機に到達致し居り候故、小生はむしろ喜んでこの超畜生道に堕落しつつある地球の表面より消え去ることを歓迎致し居り候も唯小生が理想したる戦後の一大軍縮を見ることなくして早くもこの世を去ることは如何にも残念至極に御座候」

平沼、念願の枢密院議長に

機関説排撃論者から、政治攻撃の目標とされ続けてきた一木(枢密院議長)は、二・二六事件後の昭和11年3月11日、病気を理由に辞任。「ファッショに近き者」として、久しく副議長に留め置かれていた平沼が議長に昇格した。
美濃部の同窓生(明治30年東大法学部卒業)は、絶えて開かれたことのなかった同窓会を開催、美濃部と恩師である一木を慰めたという。